

覚せい剤中毒患者の実態調査

山崎病院院長 山崎 敏雄
瀬野川病院院長 津久江一郎

I 目的

「覚せい剤中毒の診断に関する臨床医学的研究」という研究課題の中の、「覚せい剤中毒患者の実態調査」が私の分担であり、全国的な規模での覚せい剤中毒患者の発生状況を調査し、覚せい剤中毒の臨床診断の参考とすることを目的とする。

II 調査方法とその結果

先づ第1次調査として、昭和57年4月に薬物乱用者調査票（附表1）を、全国の国公立病院（精神病床を有する病院）206病院、及び私立精神病院（日本精神病院協会会員病院）1066病院、合計1274病院に送付した。その結果、国公立病院（精付表1）

薬物乱用者調査票

病院名

住 所

(入院用)

区分	昭56年(1月~12月) 入院総数	現在入院している 患者数
入院患者数	名	名
覚醒剤		
シンナー等有機溶剤		
アルコール症		
その他の薬物依存		
小計		

外来用

区分	昭56年(1月~12月) 外来通院人員	現在外来通院中の患者数
覚醒剤		
シンナー等有機溶剤		
アルコール症		
その他の薬物依存		
計		

(注) 入院、外来いづれも同一患者が、2回以上入院、又は外来受診の場合はその都度1人として計上すること。

精神病床を有する病院) 86病院、私立精神病院(日本精神病院協会会員病院) 669病院、合計755病院から回答を得た。回答率は59.3%であり、その結果について以下に述べる。

全国の覚せい剤乱用患者について、昭和56年1月から12月までの入院患者数は1283名（うち国公立病院196名、私立精神病院1087名）、外来患者数は1406名（うち国公立病院330名、私立精神病院1076名）である。次に昭和57年4月現在の入院患者数は335名（うち国公立病院60名、私立精神病院275名）、外来患者数は386名（うち国公立病院94名、私立精神病院292名）である。これを表にあらわすと表1の通りであるが、ここで男女の区別をしていないのは、次の第2次個人調査票で男女の区別があらわれてくると考えたからである。

表1 覚せい剤乱用患者数

区分	昭和56年(1月~12月)			昭和57年4月現在		
	国公立病院	私立精神病院	計	国公立病院	私立精神病院	計
入院	196 (15.3%)	1,087 (84.7%)	1,283	60 (17.9%)	275 (82.1%)	335
外来	330 (23.5%)	1,076 (76.5%)	1,406	94 (24.4%)	292 (75.6%)	386

尚、昭和56年1月から12月までの一年間、及び昭和57年4月現在の入院及び外来についての各県別覚せい剤乱用患者数を表にあらわすと、表2の通りである。この表でいえることは、大体全国的に発生しているが、その中でも東京都を中心とした関東一円、静岡県、愛知県、阪神地区、四国各县、岡山県、広島県等に多く、特に福岡県は群を抜いて多い。

表2 各県別覚せい剤乱用患者数

区分 県名	昭和56年(1月~12月)		昭和57年4月現在	
	入院	外来	入院	外来
1. 北海道	36	76	11	10
2. 青森	4	5	1	2
3. 岩手	3	34	2	2
4. 宮城	23	3	0	1
5. 秋田	2	1	3	1
6. 山形	0	0	0	0
7. 福島	8	3	7	3
8. 茨城	21	74	2	11
9. 栃木	17	40	7	6
10. 群馬	8	15	5	3
11. 埼玉	7	15	4	12
12. 千葉	48	104	22	50
13. 東京	138	113	24	55
14. 神奈川	54	67	17	10
15. 新潟	1	7	0	4
16. 富山	1	1	0	0
17. 石川	14	10	2	1
18. 福井	1	2	1	0
19. 山梨	12	66	2	20
20. 長野	12	7	0	0
21. 岐阜	17	12	1	1
22. 静岡	31	56	11	16
23. 愛知	104	41	12	6
24. 三重	3	32	2	1
25. 滋賀	1	4	0	1
26. 京都	3	4	1	3
27. 大阪	103	107	28	32
28. 兵庫	58	29	16	9
29. 奈良	48	15	4	10
30. 和歌山	6	30	5	1
31. 鳥取	2	1	0	0
32. 島根	4	3	1	1
33. 岡山	34	110	7	15
34. 広島	65	41	16	15
35. 山口	1	5	0	0
36. 徳島	23	6	3	4
37. 香川	19	17	17	14
38. 愛媛	56	32	6	3
39. 高知	63	41	8	4
40. 福岡	160	105	68	43
41. 佐賀	7	2	3	4
42. 長崎	4	7	1	1
43. 熊本	16	52	7	5
44. 大分	7	7	3	0
45. 宮崎	6	4	3	1
46. 鹿児島	24	0	2	0
47. 沖縄	0	0	0	0
計	1,283	1,406	335	386

次に第2次調査として、昭和57年7月に第1次調査で覚せい剤乱用者を取扱っていると回答のあった施設、327病院に覚せい剤乱用実態個人調査票（附表Ⅱ）を送付し、その回答を求めた。以下に回答のあった個人調査票にもとづいて、その結果を述べる。

1) 回収状況

回答のあった施設数は118病院で、個人調査票の回答者数は504名（うち男429名、女75名）である。これを入院（昭和56年度以降に入院したことのあるもの、及び現在入院中のもの）と外来（過去に入院経験のないもので、昭和56年1月から昭和57年7月までに外来通院したことのあるもの、及び現在外来通院中のもの）に分けると表3の通りである。

表3 個人調査票回答者数

区分	性別		
	男	女	計
入院	371 (86.5%)	63 (84%)	434 (86.1%)
外来	58 (13.5%)	12 (16%)	70 (13.9%)
計	429 (100%)	75 (100%)	504 (100%)

2) 年齢構成

表4は年齢構成をあらわしたもので、この表によると、男は31才から35才までの層にピークがみられるが、女は20才までの若年層及び、26才から30才までの層が多いのが注目される。

表4 年令構成

年令 区分	性別		
	男	女	計
~ 20	22(5.1%)	15(20.0%)	37(7.3%)
21 ~ 25	61(14.2%)	13(17.3%)	74(14.7%)
26 ~ 30	70(16.3%)	15(20.0%)	85(16.9%)
31 ~ 35	116(27.0%)	13(17.3%)	129(25.6%)
36 ~ 40	73(17.0%)	10(13.3%)	83(16.5%)

41 ~ 45	38(8.9%)	6(8.0%)	44(8.7%)
46 ~ 50	29(6.8%)	2(2.7%)	31(6.2%)
51 ~	18(4.2%)	1(1.3%)	19(3.8%)
不 明	2(0.5%)	0	2(0.4%)
計	429(100%)	75(99.9%)	504(100.1%)

3) 来院時の職業

表5はその職業別一覧表である。この表で注目されるのは無職の者が圧倒的多數で、ついで暴力団関係、土木建築業等が多い。

表5 職業別一覧表

区分 職業	入 院	外 来	計
無 職	174(40.0%)	30(42.9%)	204(40.5%)
暴 力 団	42(9.7%)	5(7.1%)	47(9.3%)
工 員	22(5.1%)	4(5.7%)	26(5.2%)
交通運輸業	23(5.3%)	3(4.3%)	26(5.2%)
風俗営業	22(5.1%)	2(2.9%)	24(4.8%)
飲 食 業	23(5.3%)	4(5.7%)	27(5.4%)
土木建築業	37(8.5%)	7(10.0%)	44(8.7%)
主 婦	13(3.0%)	2(2.9%)	15(3.0%)
農 漁 業	9(2.1%)	0	9(1.8%)
商店主、店員	15(3.5%)	3(4.3%)	18(3.6%)
職 人	13(3.0%)	0	13(2.6%)
日 履 い	6(1.4%)	2(2.9%)	8(1.6%)
学 生	6(1.4%)	2(2.9%)	8(1.6%)
公 務 員	2(0.5%)	1(1.4%)	3(0.6%)
旅 館 業	2(0.5%)	3(4.3%)	5(1.0%)
そ の 他	34(7.8%)	2(2.9%)	36(7.1%)
不 明	4(0.9%)	0	4(0.8%)
計	447(100.1%)	70(100.2%)	517(102.8%)

4) 医療費支払区分

表6は医療費支払区分で、表によると国保が一番多く、ついで生保、措置の順である。

5) 来院経緯

表7は来院経緯をしめしたものであるが、入院、外来を通じて、男女共に“家族のすすめ”が多い。ついで入院の場合は男女共に、“警察から”が多く、外来の場合は男女共に、“自発的に”が

表6 医療費支払区分

区分 支払 の種類	男	女	計
措 置	85(20.0%)	5(6.7%)	90(17.9%)
生 保	125(29.1%)	27(36.0%)	152(30.2%)
国 保	158(36.8%)	28(37.3%)	186(36.9%)
社 保	50(11.7%)	13(17.3%)	63(12.5%)
私 費	3(0.7%)	1(1.3%)	4(0.8%)
そ の 他	3(0.7%)	1(1.3%)	4(0.8%)
不 明	5(1.2%)	0	5(1.0%)
計	429(100.2%)	75(99.9%)	504(100.1%)

表7 来院経緯

区 分 来院経緯	入 院			外 来			計
	男	女	計	男	女	計	
自 発 的 に	36	6	42 (9.7%)	20	3	23 (32.9%)	65 (12.9%)
家 族 の す す め	154	31	185 (42.6%)	23	5	28 (40.0%)	213 (42.3%)
保 健 所 か ら	32	3	35 (8.1%)	1	0	1 (1.4%)	36 (7.1%)
警 察 か ら	121	12	133 (30.6%)	4	2	6 (8.6%)	139 (27.6%)
そ の 他	24	11	35 (8.1%)	8	2	10 (14.3%)	45 (8.9%)
不 明	4	0	4 (0.9%)	2	0	2 (2.9%)	6 (1.2%)
計	371	63	434 (100%)	58	12	70 (100.1%)	504 (100%)

多い。全体的には、“家族のすすめ”が最も多く、ついで“警察から”“自発的に”的順である。

6) 来院時の直接の問題行動

来院時の直接の問題行動を示したのが表8である。入院の場合は男女共に、“暴行”が一番多く、ついで“器物損壊”である。“脅迫・恐喝”が男に多く、女は他に比して“自殺企図”が多い。外来の場合は、女に余り直接の問題行動は少なく、男

表8 来院時の直接の問題行動

区分 問題行動	入院			外来			計
	男	女	計	男	女	計	
傷害	38	2	40 (9.3%)	1	0	1 (1.4%)	41 (8.1%)
暴行	115	6	121 (28.2%)	7	0	7 (10.0%)	128 (25.4%)
自傷	31	3	34 (7.9%)	1	0	1 (1.4%)	35 (6.9%)
自殺企図	28	4	32 (7.5%)	1	0	1 (1.4%)	33 (6.5%)
器物損壊	93	4	97 (22.6%)	4	1	5 (7.1%)	102 (20.2%)
脅迫・恐喝	54	0	54 (12.6%)	1	0	1 (1.4%)	55 (10.9%)
なし	61	22	83 (19.3%)	23	8	31 (44.3%)	114 (22.6%)
その他	127	26	153 (35.7%)	16	3	19 (37.1%)	170 (33.7%)
不明	18	2	20 (4.7%)	7	0	7 (10.0%)	27 (5.4%)
計	565	69	634 (147.8%)	61	14	73 (114.1%)	707 (139.7%)

に“暴行”“器物損壊”がみられる。

7) 体型

表9は体型をしめたものであるが、男女共に細長型が多い。ついで男は闘士型が多く、女は肥満型が多い。

表9 体型

区分 体型	男		女		計
	男	女	男	女	
細長型	185		46		231 (45.8%)
闘士型		138		8	146 (29.0%)
肥満型		64		17	80 (15.9%)
その他		15		4	19 (3.8%)
不明		27		0	27 (5.4%)
計	429		75		504 (99.9%)

8) 最終学歴

最終学歴をしめたのが表10である。

この表によれば、“中学卒”が半数に近い。ついで“中途退学”だが、この項はすべての学校の中途退学を、ここに含めている。これにつぐのが“高校卒”である。

表10 最終学歴

区分 学歴	男	女	計
	男	女	
小学校	11	3	14 (2.8%)
中学校	201	31	232 (46.0%)
高校	74	18	92 (18.3%)
大学	9	1	10 (2.0%)
各種専門学校	8	1	9 (1.8%)
中途退学	111	17	128 (25.4%)
その他	0	0	0
不明	15	4	19 (3.8%)
計	429	75	504 (100.1%)

9) 乱用以前の非行、犯罪歴

乱用以前の非行、犯罪歴をしらべたのが表11である。男は“刑務所”について“補導(警察)”が圧倒的に多く、女は“怠学”“補導(警察)”が多い。

表11 乱用以前の非行、犯罪歴

区分 非行、 犯罪歴	男	女	計
	男	女	
怠学	66	14	80 (15.9%)
補導(学校)	52	4	56 (11.1%)
補導(警察)	101	16	117 (23.2%)
鑑別所	44	4	48 (9.5%)
少年、少女院	54	5	59 (11.7%)
刑務所	110	2	112 (22.2%)
その他	41	10	51 (10.1%)
不明	140	32	172 (34.1%)
計	608	87	695 (137.8%)

10) 過去に精神科、精神病院に来(入)院した回数

表12は過去に精神科、精神病院に来(入)院した回数(他の疾患で来(入)院した場合を含む)についての表である。男は“1回”ついで“2回”の順であるが、女は“1回”ついで“3回以上”が多い。

表12 来(入)院した回数

区分 回数	男	女	計
なし	147(34.3%)	25(33.3%)	172(34.1%)
1回	83(19.3%)	15(20.0%)	98(19.4%)
2回	52(12.1%)	4(5.3%)	56(11.1%)
3回	27(6.3%)	4(5.3%)	31(6.2%)
3回以上	45(10.5%)	6(8.0%)	51(10.1%)
不明	75(17.5%)	21(28.0%)	96(19.0%)
計	429(100%)	75(99.9%)	504(99.9%)

11) 薬物乱用(複合使用)

覚醒剤乱用実態個人調査票の(18)薬物乱用の項に記載されていた267名について、薬物乱用の既往と、今回入院時の乱用の状況とを組合せたのが、表13である。例えば既往では複合使用がみられたが、今回入院時は覚せい剤のみとか、既往で複合使用がみられたが、今回入院時も複合使用がみられる等を表にしたものである。この表によれば、既往に複合使用があったものでも、今回入院時は覚せい剤のみというものが大多数である。

表13 薬物乱用(複合使用)

乱用の既往	今回入院時	計
覚せい剤	覚せい剤	125(46.8%)
シンナー	"	18(6.7%)
覚せい剤・シンナー	"	22(8.2%)
覚せい剤・アルコール	"	22(8.2%)
覚せい剤・シンナー アルコール	"	3(1.1%)
アルコール	"	2(0.8%)
覚せい剤・睡眠剤	"	3(1.1%)

覚せい剤・シンナー 睡眠剤	"	2(0.8%)
覚せい剤・精神安定剤	"	2(0.8%)
覚せい剤・鎮痛剤	"	2(0.8%)
覚せい剤・アルコール 睡眠剤	"	2(0.8%)
覚せい剤・アルコール 睡眠剤・精神安定剤	"	2(0.8%)
覚せい剤	覚せい剤・アルコール	6(2.2%)
アルコール	"	2(0.8%)
覚せい剤・アルコール	"	19(7.1%)
なし	"	3(1.1%)
覚せい剤・シンナー	覚せい剤・シンナー	3(1.1%)
その他の複合使用		29(10.9%)
	計	267(100.1%)

12) 合併症

合併症の記載のあったものを、表にあらわしたのが表14である。表によれば、“肝障害”“肝炎”が圧倒的に多く、ついで慢性胃炎である。この表に精神分裂病7名、(男5名、女2名)があげられているが、どちらが主病なのか、又精神分裂病との鑑別診断にも関係がありそうである。

表14 合併症

区分 疾患名	男	女	計
肝障害	75	5	80(15.9%)
肝炎	55	0	55(10.9%)
糖尿病	8	1	9(1.8%)
精神分裂病	5	2	7(1.4%)
胃炎	5	0	5(1.0%)
慢性胃炎	51	3	54(10.7%)
胃潰瘍	4	1	5(1.0%)
低血圧症	2	0	2(0.4%)
肺結核	5	0	5(1.0%)
慢性酒精嗜癖	5	0	5(1.0%)
慢性酒精中毒	1	0	1(0.2%)
うつ状態	4	1	5(1.0%)
気管支喘息	5	0	5(1.0%)
その他	62	14	76(14.9%)
計	287	27	314(62.2%)

13) 身体的特徴

表15は身体的特徴をあらわしたもので、 “注射痕” がはっきりみられるのは、男 261 名、女 44 名である。“文身”は男 114 名、女 4 名にみられ、“指つめ”が男 75 名にみられるのは、“職業別一覧表”の中の “無職” の中にも、暴力団関係が含まれている事が、この点からも推測される。

表15 身体的特徴

区分 特徴	男	女	計
注射痕	261	44	305(60.5%)
硬結	68	4	72(14.3%)
文身	114	4	118(23.4%)
指つめ	75	0	75(14.9%)
その他	37	4	41(8.1%)
計	555	56	611(121.2%)

14) 最初の動機

最初の動機を集計したのが、表16である。この表によると、男は “好奇心” ついで “誘惑” が多く、女は “好奇心” “誘惑” とも大体同じ様な数で多い。全体的には “好奇心” “誘惑” が 85.7% を占める。

表16 最初の動機

区分 動機	男	女	計
好奇心	204(47.6%)	28(37.3%)	232(46.0%)
誘惑	172(40.1%)	28(37.3%)	200(39.7%)
強制	12(2.8%)	14(18.7%)	26(5.2%)
その他	28(6.5%)	4(5.3%)	32(6.3%)
不明	13(3.0%)	1(1.3%)	14(2.8%)
計	429(100%)	75(99.9%)	504(100%)

15) 継続使用の理由

表17は継続使用の理由を示したもので、男は “快感” ついで “疲労除去” が多く、女は “快感” “性的効果” “ただなんとなく” が、殆んど同じ様な数である。全体的には “快感” が 31.7%， “疲

労除去” が 26.2% で、 “ただなんとなく” 19.8% がこれにつぐ。

表17 継続使用の理由

区分 理由	男	女	計
快感	138	22	160(31.7%)
性的効果	47	18	65(12.9%)
疲労除去	118	14	132(26.2%)
賭博	40	2	42(8.3%)
ただなんとなく	83	17	100(19.8%)
その他	35	9	44(8.7%)
不明	72	10	82(16.3%)
計	533	92	625(123.9%)

16) 初回使用年令

覚せい剤を最初に使用した年令は、表18によると、男は “20才代” に最も多く、43.6%，女は “10才代” “20才代” と略同じぐらいで、夫々 34.7%，36.0% である。全体的には “20才代” が 42.5%，ついで “30才代” で、21.8% であるが、“10才代” に 18.8% をしめていることは注目にあたいする。

表18 初回使用年令

区分 年令	男	女	計
～19	69(16.1%)	26(34.7%)	95(18.8%)
20～29	187(43.6%)	27(36.0%)	214(42.5%)
30～39	96(22.4%)	14(18.7%)	110(21.8%)
40～49	13(3.0%)	2(2.7%)	15(3.0%)
50～	3(0.7%)	1(1.3%)	4(0.8%)
不明	61(14.2%)	5(6.7%)	66(13.1%)
計	429(100%)	75(100.1%)	504(100%)

17) その後の使用経過

“断続的使用” が圧倒的に多く、男 260 名 (60.6%) 女 45 名 (60.0%) である。(表19)

18) 乱用回数

入院の男は “1日1回以上” が 30.7% が多いが、入院の女は “1日1回以上” と “月に数回” が夫々

表19 その後の使用経過

区分 経過	男		女		計
	男	女	男	女	
断続的	260(60.6%)	45(60.0%)	305(60.5%)		
継続的	90(21.0%)	16(21.3%)	106(21.0%)		
不明	79(18.4%)	14(18.7%)	93(18.5%)		
計	429(100%)	75(100%)	504(100%)		

表21 亂用期間

区分 期間	入院			外 来			計
	男	女	計	男	女	計	
1~2回	3	1	4 (0.9%)	1	0	1 (1.4%)	5 (1.0%)
1週間以内	10	3	13 (3.0%)	1	0	1 (1.4%)	14 (2.8%)
1ヶ月以内	16	3	19 (4.4%)	5	0	5 (7.1%)	24 (4.8%)
1~3ヶ月	26	3	29 (6.7%)	5	2	7 (10.0%)	36 (7.1%)
3~6ヶ月	19	6	25 (5.8%)	2	0	2 (2.9%)	27 (5.3%)
6~12ヶ月	48	11	59 (13.6%)	6	4	10 (14.3%)	69 (13.7%)
1~5年	108	18	126 (29.0%)	16	4	20 (28.6%)	146 (29.0%)
5年以上	88	8	96 (22.1%)	10	0	10 (14.3%)	106 (21.0%)
不明	53	10	63 (14.5%)	12	2	14 (20.0%)	77 (15.3%)
計	371	63	434 (100%)	58	12	70 (100%)	504 (100%)

表20 亂用回数

区分 回数	入院			外 来			計
	男	女	計	男	女	計	
1日1回以上	114 (30.7%)	14 (22.2%)	128 (29.5%)	10 (17.2%)	3 (25.0%)	13 (18.6%)	141 (28.0%)
1日1回程度	43 (11.6%)	8 (12.7%)	51 (11.8%)	9 (15.5%)	2 (16.7%)	11 (15.7%)	62 (12.3%)
週に数回	70 (18.9%)	11 (17.5%)	81 (18.7%)	7 (12.1%)	3 (25.0%)	10 (14.3%)	91 (18.1%)
月に数回	48 (12.9%)	13 (20.6%)	61 (14.1%)	8 (13.8%)	0 (11.4%)	8 (13.7%)	69
時たま	27 (7.3%)	7 (11.1%)	34 (7.8%)	7 (12.1%)	1 (8.3%)	8 (11.4%)	42 (8.3%)
不明	69 (18.6%)	10 (15.9%)	79 (18.2%)	17 (29.3%)	3 (25.0%)	20 (25.6%)	99 (19.6%)
計	371 (100%)	63 (100%)	434 (100%)	58 (100%)	12 (100%)	70 (100%)	504 (100%)

22.2%, 20.6%で多い。外来は男女共に乱用回数には大きな差はない。(表20)

19) 亂用期間

乱用期間をあらわしたのが、表21である。この表によれば、“1~5年”が入院、外来、男女共に多く、29.0%，ついで“5年以上”が21.0%である。即ち、長期乱用が特徴的である。

20) 使用法

静脈注射が入院外来ともに圧倒的に多い。(表22)

21) 入手方法

表22 使用法

区分 使用法	入院		外 来		計
	入院	外 来	入院	外 来	
静脈注射	344		41		385(76.4%)
皮下又は筋注		22		7	29(5.8%)
経 口		10		0	10(2.0%)
そ の 他		3		23	26(5.2%)
不 明	71		0		71(14.1%)
計	450		71		521(103.5%)

“売人”が35.3%で多く、ついで“友人”“仲間”の順で、夫々20.4%, 18.7%である。(表23)

22) 身体症状

身体症状ありの中には、入院、外来ともに、“やせた”という回答が多い。“けいれん”ありが、入院19名、外来3名みられるのは注目すべきである。

表23 入手方法

入手方法	計
売人	178(35.3%)
友人	103(20.4%)
仲間	94(18.7%)
その他の人	45(8.9%)
不明	112(22.2%)
計	532(105.5%)

表24 身体症状

区分 身体症状	身体症状				けいれん				覚せい剤検出反応			
	あり	なし	不明	計	あり	なし	不明	計	(+)	(-)	不明	計
入院	184 (42.4%)	192 (44.2%)	58 (13.4%)	434 (100%)	19 (4.4%)	319 (73.5%)	96 (22.1%)	434 (100%)	50 (11.5%)	29 (6.7%)	355 (81.8%)	434 (100%)
外来	21 (30.0%)	34 (48.6%)	15 (21.4%)	70 (100%)	3 (4.3%)	42 (60.0%)	25 (35.7%)	70 (100%)	0 (%)	5 (7.1%)	65 (92.9%)	70 (100%)

“覚せい剤検出反応”については施行しない傾向がみられる。(表24)

23) 入院時及び初診時の状態像(精神症状)

“不眠”が最も多く、ついで“幻覚”“妄想”が

表25 入院時及び初診時の状態像

区分 状態像	入院	外来	計
食欲不振	173	19	192
不安定	253	36	289
集中力低下	184	25	209
不眠	248	43	291
易怒	181	21	202
神経衰弱	38	7	45
精神錯乱	105	8	113
鈍麻	64	5	69
日常生活の意欲減退	161	25	186
常同強迫行為	33	0	33
幻覚	237	34	271
妄想	222	35	257
その他	100	7	107

これにつぐ。更に“集中力低下”“易怒”“食欲不振”が多い。状態像の詳細については、他の分担研究者が報告される予定なので、この程度にとどめる。(表25)

24) 治療

入院は96.1%が“薬物療法”を受けている。

同時に78.3%までが、“精神療法”をうけている。外来では“薬物療法”が81.4%で、“精神療法”が55.7%である(表26)

表26 治療

区分 治療	入院	外来	計
薬物療法	417(96.1%)	57(81.4%)	474(94.0%)
作業療法	131(30.2%)	5(4.1%)	136(27.0%)
精神療法	340(78.3%)	39(55.7%)	379(75.2%)
その他	15(3.5%)	9(12.9%)	24(4.8%)

25) 医療管理上の問題点

“看護者に対する反抗”が男女共に多く、29.2%、ついで“威嚇”“弱い者いじめ”も男女共に多く、夫々19.8%、14.33%である。“ない”が約1/3の33.5%みられるのも注目される。“その他”の中には派閥形成が随分多く含まれている。(表27)

表27 医療管理上の問題点

区分 問題点	男	女	計
暴行	36(8.4%)	4(5.3%)	40(8.0%)
弱い者いじめ	65(15.2%)	7(9.3%)	72(14.3%)
威嚇	93(21.7%)	7(9.3%)	100(19.8%)
脱院	33(7.7%)	6(8.0%)	39(7.7%)
自傷	9(2.1%)	5(6.7%)	14(2.8%)
看護者に対する反抗	131(30.5%)	16(21.3%)	147(29.2%)
なし	141(32.9%)	28(37.3%)	169(33.5%)
その他	37(8.6%)	8(10.7%)	45(8.9%)
不明	65(15.2%)	12(16.0%)	77(15.3%)

26) 保護室の使用

“一時的”が男は69.3%、女は57.1%で多く、“なし”は男は19.4%、女は36.5%である。(表28)

表28 保護室の使用

区分 有無(期間)	男	女	計
全入院期間	32(8.6%)	1(1.6%)	33(7.6%)
一時的	257(69.3%)	36(57.1%)	293(67.5%)
なし	72(19.4%)	23(36.5%)	95(21.9%)
不明	10(2.7%)	3(4.8%)	13(3.0%)
計	371 (100%)	63 (100%)	434 (100%)

27) 転 帰

転帰を集計したのが、表29である。入院の部の“軽快”は40.3%，“治癒”は6.5%となっている。退院後直ちに“警察へ”が5.5%である。外来の部は“医療中断”が40.0%で最も多く，“軽快”は31.4%，治癒は1.4%である。入院の部の“その他”は殆んどが入院中である。

表29 転 帰

区分 転帰	入 院	外 来	計
治 癒	28(6.5%)	1(1.4%)	29(5.8%)
軽 快	175(40.3%)	22(31.4%)	197(39.1%)
未 治	98(22.6%)	4(5.7%)	102(20.2%)
転 科	3(0.7%)	2(2.9%)	5(1.0%)
医療中断	21(4.8%)	28(40.0%)	49(9.7%)
警 察 へ	24(5.5%)	0	24(4.8%)
そ の 他	66(15.2%)	4(5.7%)	70(13.8%)
不 明	19(4.4%)	9(12.9%)	28(5.6%)
計	434 (100%)	70 (100%)	504 (100%)

III 考 察

今回の研究目的は先述したように全国的な規模での覚せい剤中毒患者の発生状況を調査することである。

先づ第1次調査として覚せい剤中毒患者の昭和56年度及び、昭和57年4月現在の入院、外来について調査する予定であったが、近時、シンナー等の有機溶剤、アルコール症、その他の薬物依存等

についても、重要な問題なので、附表Ⅰのようにこの調査機会をかりて、これ等の発生状況をも調べた。しかし、報告は今回の研究目的にそって、覚せい剤中毒患者についての発生状況のみとする。ついで、第1次調査で回答のあった覚せい剤中毒患者を取扱っている施設に、附表Ⅱを送付した。これが第2次調査である。第2次調査については、今回の調査がアンケート形式をとっているので、覚せい剤中毒患者の生活歴、既往歴、臨床症状等についての単純な集計と、これら相互の関連にもとづいて、若干の考察を加えることにする。考察の前に、こゝで二点について附言する。その一点は、覚せい剤乱用実態個人調査票(Ⅰ)(附表Ⅱ)の項目の中には集計していないものが、みられることである。これは最初の意図に反して、非常に集計が困難で、又時間的余裕がなかったこと、報告時に余り必要性がないと考えたこと、及び他の調査班で、私に与えられた分担研究の「覚せい剤フラッシュバックの実態調査」に利用したこと等のためである。つぎの一点は、覚せい剤乱用実態個人調査票(Ⅱ)(附表Ⅱ)についてであるが、これは患者本人に記載させる目的であったが、調査時すでに本人が退院して連絡がつかないもの、間違って医師が記載したもの、暴力団関係で記載してもらえないかったもの、その他諸種の要因があって、集計が困難になったので、今回は報告をさし控えた。以上の二点を考慮して、つぎに第1次調査、第2次調査に分けて考察を加える。

1. 第1次調査について

第1次調査の結果、表1で示したように、昭和56年中には、1283名の入院患者がみられた。これは回答率59.3%の結果であるから、対象施設1274病院では、約2160名の入院患者がいたことになる。更に、昭和55年6月現在の厚生省の調査では、全国に精神病床を有する施設が、1521施設あるとされている¹⁾。昭和56年では、施設の多少の増加があるとみて、昭和56年中には、全国で2600名に近い覚せい剤中毒患者が、入院していたことになる。警察庁保安部防犯課²⁾の資料によれば、昭和50年中の覚せい剤使用検挙者数は1930名、これが年々増加の一途をたどり、昭和56年では覚せい剤使用検挙者数が、昭和50年の約5倍の9450名とな

っている。このことは、今回の調査結果からみると、昭和56年中には、覚せい剤使用検挙者数の約27.5%が、入院したことになる。

厚生省の資料によれば、昭和56年6月末現在の覚せい剤中毒の精神病院在院患者数は614名、昭和57年6月末現在では750名となっている³⁾。今回の調査では、昭和57年4月現在、覚せい剤中毒患者の入院患者数は335名、これを回答率59.3%，及び全国の施設数から推測して、678名となる。こゝに若干の差がみられるが、この差は調査時期も一つの要因と考えられる。

覚せい剤乱用患者の昭和56年中の入院患者数は、今回の調査では国公立病院196名(15.3%)、私立精神病院1087名(84.7%)で、大部分の覚せい剤乱用患者は、私立精神病院に入院したことになる。この問題については、後述する医療管理上の問題点との関連性に於て、昭和56年11月、社団法人日本精神病院協会が、厚生省に提出した「覚せい剤対策等に関する要望書」⁴⁾を大いに参考にする必要があると考える。

各県別の覚せい剤乱用患者数は表2にあらわしている。これによれば、覚せい剤乱用患者は、大体全国的に発生しているが、その中でも特に福岡県が多く、入口比からみても群をぬいている。福岡県の昭和56年中の覚せい剤乱用入院患者数は160名となっているが、警察庁保安部防犯課の資料²⁾によれば、昭和56年中の福岡県の覚せい剤使用検挙者数は547名で、全国第3位である。ところが、昭和56年中の覚せい剤使用検挙者数の第1位は、東京都の1322名で²⁾、昭和56年中の覚せい剤乱用入院患者数は138名となっている。覚せい剤使用検挙者数と、覚せい剤乱用入院患者数とは、必ずしも比例しないことは当然であるが、このことは、検挙されても精神病院に入院しないで、巷に徘徊している覚せい剤乱用者が、多数存在すると考えられる。ちなみに、昭和56年中の覚せい剤使用検挙者数第2位は、大阪府で1049名²⁾、昭和56年中の覚せい剤乱用入院患者数は103名となっている。何れにしても、東京都、大阪府、福岡県等の大きな都府県に、覚せい剤乱用者が密集していることが実証されている。

2. 第2次調査について

個人調査票回答者数504名のうち、入院患者数434名(86.1%)（うち男371名85.5%，女63名14.5%）、外来患者数70名(13.9%)（うち男58名82.9%，女12名17.1%）である。外来患者については、先に回収状況で説明したように、一度も入院経験のないものである。この結果から考えられることは、覚せい剤中毒は他の精神障害と比較して、明らかに外来通院のみにては、治療しがたいことを示している。尚、434名の入院患者中には、第1次乱用期から引続いて入院している患者が、3名入っていることをつけ加えておく。

覚せい剤乱用患者の年令は、30才代が42.1%となっており、約半数を占める。山下ら⁵⁾や福井⁶⁾は、覚せい剤乱用検挙者から年令構成を出しているが、やはり30才代が37.9%と最も多い⁵⁾⁶⁾。これを男女別にみると、男は31才から35才までが27%，女は10才代から25才までが37.3%で最も多い。要するに、26才から30才代の働きざかりの、中青年層が圧倒的に多い。

無職の者が40.5%と約半数いるが、“売人”から入手するもの35.3%を考え合わせて、覚せい剤購入資金が、どのような形で獲得されるのかを推測する時、こゝに犯罪の匂が強く感ぜられる。

医療費支払区分では、“措置”が17.9%、“国保”が36.9%となっているが、市川ら⁷⁾の報告書によれば、“措置”は20%、“国保”37%⁷⁾で、昭和52年と今回の調査では、“措置”が若干少なくなっているが、余り大きな変化はない。

来院経緯については、市川ら⁷⁾の報告書では、“家族のすゝめ”が32%だが⁷⁾、今回の調査では42.3%と可成りの増加がみられる。これは、覚せい剤の恐しさが、一般市民層に普及されて来たことを、示していると考える。“警察から”が27.6%となっているが、これは先述の昭和56年中に、覚せい剤使用検挙者数の27.5%が入院したことと、偶然にも一致している。

来院時の直接問題行動は、“暴行”“器物破壊”が多く、両者を合わせると45.6%にのぼる。このように措置要件に該当するものが多いわりに、医療費支払区分での“措置”的割合が低いのは疑問である。

覚せい剤中毒患者は“中学卒”が46%と約半数を占める。“怠学”や学業を途中で放棄している者が多いのと、無職の者が多いのとは、特に関連性があると考えられる。

覚せい剤中毒患者は過去に、“非行”や“犯罪歴”を有するものが66.7%と非常に多いが、暴力団との接点も、この部分にあると推察される。

覚せい剤使用の最初の動機は、“好奇心”が46.0%，又“誘惑”が39.7%で、“好奇心”と“誘惑”がその大部分をしめている。これは山下ら⁵⁾の“好奇心”が45%⁵⁾と略一致する。継続使用の理由が、“快感”31.7%，“疲労除去”，26.2%にみられるが、これにより享楽的傾向が可成りうかがえる。

“注射痕”“硬結”が74.8%，市川らの報告書の74.0%⁷⁾と殆んど同じ結果が出ているのは、診断の補助として価値あるデータと考える。

覚せい剤乱用の使用経過は、“断続的使用”が60.5%，そして乱用期間は“1年から5年”及び“5年以上”を合わせると50%をしめる。この両者から考えられることは、覚せい剤は断続的に長期にわたって、乱用されていることがわかる。

複合使用の問題であるが、覚せい剤とシンナー、アルコール、鎮痛剤、睡眠剤等と、いろいろな組合せで複合使用されているが、結局は最後に、覚せい剤のみに落ちつくものが多い。

覚せい剤検出反応は81.8%に“不明”的結果が出ているが、このことについては、津久江によれば、覚せい剤中毒者は、多くは尿中より覚せい剤が検出することを知っているため、なかなか採尿に応じてくれない場合が多いためであるという⁸⁾。

身体症状、及び精神症状の考察については他の分担研究者にゆずるとして、次の2つの結果を報告するにとどめる。その1つは、けいれん発作が、504名中22名(4.4%)にみられたこと、今1つは、初診時に一番多くみられた精神症状、“不安定”“不眠”“幻覚”“妄想”である。

フラッシュバックについては、他の調査班で私の分担である「覚せい剤フラッシュバックの実態調査」で報告する。

入院中の医療管理上の問題として、“看護者に対する反抗”29.2%，“威嚇”が19.8%みられる。又保護室の使用が75.1%みられるのとあいまって、物的、人的に重装備な施設の必要性を、これは明確に証明していると考えられる。山下ら⁵⁾や福井⁶⁾もこの点を強調している。

以上、第1次調査、第2次調査に分けて考察を加えたが、一応初期の研究目的は達したものと考える。最後に文中、“乱用”と“中毒”という言葉が、まぎらわしく使われているが、同じ意味と解釈して使用したことを附言する。

(注) この調査・研究は厚生省から委託を受けて、科学技術庁特別振興調整費により調査を実施したものである。

文 献

1. 厚生省公衆衛生局精神衛生課監修：我が国の精神衛生、昭和56年版
2. 警察庁保安部防犯課：覚せい剤・麻薬事犯の実態と取締状況、昭和56年度、昭和50年度
3. 厚生省公衆衛生局：病名別・性別・年令別・精神病院在院患者数、昭和56年6月現在、昭和57年6月現在
4. 社団法人日本精神病院協会：覚せい剤対策等に関する要望書、昭和56年11月
5. 山下格、森田昭之助：覚せい剤中毒、金剛出版、東京、1980
6. 福井進：覚せい剤乱用の現状と社会的背景、臨床精神医学、10：1981
7. 市川達郎等：覚せい剤中毒診断・治療法調査研究報告書、覚せい剤中毒診断・治療法調査研究班、厚生省委託研究
8. 津久江一郎：覚せい剤中毒の臨床像、臨床精神医学、10：1981

付表 I

①

記入年月日

病院名_____

TEL () -

覚醒剤乱用実態個人調査票(Ⅰ)

記入に当っての注意事項

1. 各項目に該当する数字に○印をつけて下さい。
2. 「その他」等の項にはできるだけ詳細に記入して下さい。
なお□の所は記入しないで下さい。
3. 亂用方法及び病的体験は非常に複雑多岐であり、その状態はまだ十分に科学的には把握できていませんので、出来ましたら、調査票(Ⅱ)(5, 6頁)は切り取り線から切り離して、現在来(入)院中の患者自身に記入させて下さい。なお、切り取り部の回収の際には調査票(Ⅰ)と(Ⅱ)とが対応するようにして下さい。
4. 記入方法に不明な点があれば、日本精神病院協会(TEL 03(508)0735)にお問い合わせ下さい。

(1) 昭和56年中に覚醒剤中毒症で(1. 入院 2. 外来通院)したことがあります。



2	3	4	5	6	7	8
1						

(2) 整理番号、性別 1. 男 2. 女

1	2	3	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
M.	T.	S.										

(3) 生年月日

日生、満歳、不明

2	3	4	5	6	7	8
1						

(4) 来院時の職業

- | | | |
|------------|------------|-----------------|
| 1. 公務員 | 2. 交通運輸業関係 | 3. 風俗営業関係 |
| 4. 飲食業関係 | 5. 土木建築業関係 | 6. 旅館業関係 |
| 7. 農漁業関係 | 8. 工員 | 9. 職人(自由業) |
| 10. 商店主・店員 | 11. 日雇い労務者 | 12. 学生 |
| 13. 主婦 | 14. 暴力団 | 15. その他の職業_____ |
| 16. 無職 | | |

(注) 該当する職業の番号に○印をつけて下さい。(2つ以内)

19	20	21	22

(5) 医療費の支払い区分

- | | | | | |
|-------------|-------|-------|-------|-------|
| 1. 措置 | 2. 生保 | 3. 国保 | 4. 社保 | 5. 私費 |
| 6. その他_____ | | | | |



23

2

【生活歴及び現在歴】

(7) 来(入、退)院年月日 (S 56年1月1日から12月31日までの来(入、退)院の記録)

S 年 月 日 ~ 年 月 日
 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36

(1. 入院 2. 外来通院) 37

退院後の状況

1. 退院 2. 転院 3. 入院中
 4. 外来通院中 5. 中途退院
 6. 警察行き
 7. その他 ()

注)期間中に2回以上の来(入、退)院をくり返した場合にはその来(入、退)院の記録をすべて下の余白に記入して下さい。

39

(8) 来(入)院経緯

1. 自発的に 2. 家族のすすめ 3. 保健所から 4. 警察から
 5. その他 _____

40

(9) 来(入)院時の直接の問題行動

1. なし 2. 傷害 3. 暴行 4. 自傷 5. 自殺企図
 6. 器物損壊 7. 脅迫・恐喝 8. その他 _____

43 44

(10) 遺伝的負因

1. 精神病 2. アルコール症 3. その他の薬物依存者 (薬物の種類 _____)
 4. 犯罪者 5. その他 _____

45 46

(11) 体型 1. 細長 2. 闊士 3. 肥満 4. その他 _____

47

(12) 病前性格 _____

(13) 幼児期の躓、家庭の養育

兄弟の人数 人 出生順位 番目
 48 49

1. 欠損家庭(父、母) 2. 特に祖父母による養育 3. その他 _____

50

(14) 最終学歴 (注)中途退学の場合には該当する学校にも○をつけて下さい。)

1. 小学校 2. 中学校 3. 高校 4. 大学 5. 名種専門学校
 6. 中途退学 7. その他 _____

51 52

(15) 亂用以前の非行、犯罪歴

1. 怠学 2. 捕導(学校) 3. 捕導(警察) 4. 鑑別所
 5. 少年・少女院 6. 刑務所 7. その他 _____

53 54 55

(16) 酒の耐性

1. 飲めない 2. 飲まない 3. 最大飲酒量 ()

56 57 58 59

③

(17) 過去に精神科、精神病院に来（入）院した回数（他の疾患で来（入）院した場合も含む）

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
60	61

(18) 薬物乱用（複合使用）

薬物の種類	覚醒剤	シンナー	アルコール	鎮痛剤	睡眠薬	精神安定剤	その他							
乱用の既往	①	64	②	65	③	66	④	67	⑤	68	⑥	69	⑦	70
今回入院時	⑧	71	⑨	72	10	73	11	74	12	75	13	76	14	77

注) 複合使用の場合はすべてもれなく対応する番号に○印をつけて下さい。

(19) 合併症 _____

<input type="checkbox"/>
78

(20) 身体的特徴

1. 注射痕 2. 硬結 3. 文身 4. 指づめ
5. その他 _____

<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
81	82	83	84

(21) 最初の動機

1. 好奇心 2. 誘惑 3. 強制 4. その他 _____

85 86

(22) 繼続使用の理由

1. 快感 2. 性的効果 3. 疲労除去 4. とばく
5. ただなんとなく 6. その他 _____

87 88

(23) 初回使用の時期 S 年 月、満 歳
89 90 91 92 93 94

<input type="checkbox"/>
95

(24) その後の使用経過 1. 断続的 2. 繼続的

(25) 1回の使用量（小又は大パッケを何回に分けて使用するか）

小パッケ 回、大パッケ 回、その他 _____
96 97 98 99

注) 小パッケ(大パッケ)とは、ビニール袋に0.15~0.29g位(0.8g位)入っているものをいう。

(26) 亂用回数

1. 1日1回以上 2. 1日1回程度 3. 週に2、3回 4. 月に数回
5. ときたま（どのような時に用いたか）

) 100

(27) 亂用期間

1. 1、2回限り 2. 1週間未満 3. 1週間以上1ヶ月未満
4. 1ヶ月以上3ヶ月未満 5. 3ヶ月以上半年未満 6. 半年以上1年未満
7. 1年以上5年未満 8. 5年以上 9. 不明

101

(28) 1度に購入する覚醒剤の量及びその額（ ）円

小パッケ _____ ケ、大パッケ _____ ケ、その他 _____

102

(29) 使用法 1. 静脈注射 2. 皮下又は筋注 3. その他 _____

(30) 1ヶ月に使用する額 _____ 円位

(31) 入手経路

1. 売人 2. 友人 3. 仲間 4. その他 _____

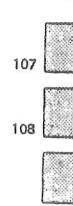
103 104

4

【臨床症状】(来(入)院時)

(32) 身体症状

1. あり(具体的に) 2. なし 3. 不明
 •けいれん 1. あり 2. なし 3. 不明
 •覚醒剤検出尿反応 1.(+) 2.(-) 3. 不明

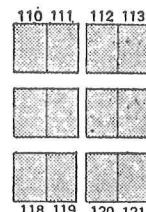


(33) 病的体験の発呈が認められた場合にはどの位の量の乱用をどの位の期間継続したか。

1回の使用量() 期間()

(34) 精神症状(来(入)院時及び初診時の状態像)

1. 食欲不振 2. 不安定 3. 集中力低下 4. 不眠 5. 易怒
 6. 神経衰弱 7. 精神錯乱 8. 鈍麻 9. 日常生活の意欲減退
 10. 常同強迫行為
 11. 幻覚()
 12. 妄想()
 13. その他()



(35) 入院直後や逮捕直後等(患者が不利な状況に陥った場合)に急な神経不適状態又は

異常行動があったか。 1. あり 2. なし 3. 不明



(36) 覚醒剤乱用により精神症状の発呈があった患者が、ある期間覚醒剤中断後(1. 視覚的刺

- 激 2. 聴覚的刺激 3. 刺激物(コーヒー、タバコ等) 4. 飲酒 5. 少量の
 覚醒剤 6. 常用量又はそれ以上の量を用いた場合 7. その他の状況)で、以前と
 同様の病的体験又は異常体験等が生じたことがあるか。



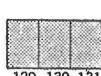
1. ある(回) 2. なし 3. 不明



(37) 治療

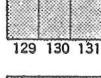
127

1. 薬物療法 2. 作業療法 3. 精神療法 4. その他



(38) 治療・病棟管理面での問題点

1. なし 2. 暴行 3. 弱い者いじめ 4. 威嚇 5. 脱院 6. 自傷
 7. 看護者に対する反抗 8. その他



(39) 保護室の使用

1. 全入院期間 2. 一時的 3. なし



(40) 転帰

1. 治癒 2. 軽快 3. 未治 4. 転科 5. 医療中断 6. 警察へ
 7. その他



その他お気付きの点があればお知らせ下さい。

ご協力誠に有難うございました。

覚せい剤中毒患者疫学調査

分担研究班長 山崎敏雄

1982. 6

覚醒剤乱用実態個人調査票(Ⅱ)

5

この調査票は純学問的な疫学調査のためのものであり、他の目的には一切利用致しませんので、部外にもれることは絶対にありません。

記入に当っての注意事項

1. 各項目に該当する数字に○印をつけて下さい。□の所は記入しないで下さい。
2. 「その他」等の項にはできるだけ詳細に記入して下さい。

私は現在 (1.入院 2.外来) 治療中であります。

(1) 性別	1. 男	2. 女	満 <input type="text"/> 歳	<input type="text"/> 141	
			142 143	<input type="text"/> 144	
(2) 生年月日 M. T. S.	1 <input type="text"/> 145	2 <input type="text"/> 146	3 <input type="text"/> 147	年 <input type="text"/> 148 149 月 <input type="text"/> 150 151 日 生、不明	<input type="text"/> 152
(3) 酒の耐性					

1. 飲めない (酒が殆ど飲めない) 2. 飲まない (飲もうと思えば少し
は飲めるが、飲む習慣がない) 3. 最大飲酒量 ()

(4) 次の薬物乱用についてお答え下さい。

薬物の種類	覚醒剤	シンナー	アルコール	鎮痛剤	睡眠薬	精神安定剤	その他
乱用の経験	1 <input type="checkbox"/> 150	2 <input type="checkbox"/> 151	3 <input type="checkbox"/> 152	4 <input type="checkbox"/> 153	5 <input type="checkbox"/> 154	6 <input type="checkbox"/> 155	7 <input type="checkbox"/> 156
今回入院時	8 <input type="checkbox"/> 157	9 <input type="checkbox"/> 158	10 <input type="checkbox"/> 159	11 <input type="checkbox"/> 160	12 <input type="checkbox"/> 161	13 <input type="checkbox"/> 162	14 <input type="checkbox"/> 163

注) 2種類以上の薬物を用いた場合にはすべてもれなく対応する番号に○印をつけて下さい。

切り取り線

(5) 最初の動機

1. 好奇心 2. 誘惑 3. 強制 4. その他 _____

<input type="text"/> 175	<input type="text"/> 176
--------------------------	--------------------------

(6) 繼続使用の理由

1. 快感 2. 性的効果 3. 疲労除去 4. とばく
5. ただなんとなく 6. その他 _____

<input type="text"/> 177	<input type="text"/> 178
--------------------------	--------------------------

(7) 初回使用の時期 S 年 月、満 歳

179 180 181 182 183 184

(8) その後の使用経過 1. 断続的 2. 繼続的

<input type="text"/> 187

(9) 1回の使用量 (小又は大パッケを何回に分けて使用するか)

小パッケ 回、大パッケ 回、その他 _____

188 189

190 191

(10) 亂用回数

1. 1日1回以上 2. 1日1回程度 3. 週に2、3回 4. 月に数回
5. ときたま (どのような時用いたか)

<input type="text"/> 192

(11) 亂用期間

1. 1、2回限り 2. 1週間未満 3. 1週間以上1ヶ月未満
4. 1ヶ月以上3ヶ月未満 5. 3ヶ月以上半年未満 6. 半年以上1年未満
7. 1年以上5年未満 8. 5年以上 9. 不明

<input type="text"/> 193

(12) 1度に購入する覚醒剤の量及びその額 () 円

⑥

小パッケ ケ、大パッケ ケ、その他 _____

(13) 使用法 1. 静脈注射 2. 皮下又は筋注 その他 _____

(14) 1ヶ月に使用する額 円位

194

(15) 入手経路

1. 売人 2. 友人 3. 仲間 4. その他 _____

195 196

(16) 亂用中に、誰もいないのに誰かの声が聞こえたり、人におそわれるような気分になったりするような不愉快な気分になったことがありますか。

1. なし 2. あり

あつた場合にはどの位の量をどの位の期間乱用しましたか。

(1回の使用量 期間)

197

(17) テレビや映画の中で実際に覚醒剤(シャブ)を打っているシーンを観て、自分が注射を打った気分になって興奮したり、口が渴いてきたり、又は酒を飲んだだけで、(あるいは何かの刺激や条件で)前に経験した不快な幻覚や妄想が出て来たりした事はありませんか。また、その他に自分で不思議な体験をした事があつたら詳しく書いて下さい。

198

切り取り線

(18) 次のことについてあなたの気持を率直に答えて下さい。(余白が少ない場合には適当に紙を追加して下さい)

注射を打ちたくなる理由は何でしたか。	注射を打ち始めた頃、注射を打った直後に、どんな気分になりましたか。(この気分はどの位続いたでしょうか。)	注射が常習化した時に注射を打った直後、どんな気分になりましたか。(この気分はどの位続きますか。)
199	200	201
期間 ()	期間 ()	期間 ()

ご協力誠に有難うございました。

覚せい剤中毒患者疫学調査
分担研究班長 山崎敏雄